教員と学生のコラボによる 留学生のための日本語教材作成

久家 淳子[*1]・永溪 晃二[*1]・古賀 崇朗[*1]・米満 潔[*1]・糸山 ゆう[*2]・古川 将大[*2]
溝上 智奈美[*2]・早瀬 郁子[*3]・城 保江[*3]・早瀬 博範[*4]・穂屋下 茂[*5]
Email: c1292@cc.saga-u.ac.jp

*1: 佐賀大学 e ラーニングスタジオ
*2: 佐賀大学理工学部
*3: 佐賀大学
*4: 佐賀大学文化教育学部
*5: 佐賀大学全学教育機構

◎Key Words　ICT 活用教育，日本語教育，教材開発

1. はじめに

佐賀大学（以下，本学と記す）には毎年多くの留学生が入学している。その中には，学業や日常生活における日本語の能力が不十分な学生も見受けられる。

そこで筆者らは，本学に留学予定の学生へのモチベーション・プログラムとして、来日前に母国で，日本での日常生活に必要な日本語を学習できる教材『留学生のための日本語』を作成し，インターネットを介して学習する e ラーニングとして提供することとした。この理由として，本学には e ラーニング用学習管理システム（LMS：Learning Management System）の利用実績があること，教材作成に e ラーニングスタジオのスタッフに加え「デジタル表現技術者養成プログラム」を履修し，デジタルコンテンツ作成能力を持つ学生を活用できることがあげられる。

本稿では，本学で留学生に日本語教育を行っている教員（以下，日本語教員と記す），e ラーニングスタジオのスタッフ（以下，スタッフと記す），および「デジタル表現技術者養成プログラム」を修了した学生（以下，修了生と記す）の協働作業による教材開発について報告する。

2. 教材作成

2.1 内容の決定

作成する教材は，本学の紹介や日常生活に関する情報など，来日後の生活に円滑に適応できるような内容とする必要がある。そのため，来日から大学での生活までをシチュエーション別に学習できるような構成とした。そこで，日本語教員がシチュエーション別に 8 課のタイトルを決定し，各タイトルのシナリオを作成した。そのシナリオをもとにスタッフと修了生で教材を作成した。今回作成した教材のタイトルと内容を表 1 に示す。

表 1　留学生のための日本語教材内容

課	タイトル	内容
1	来　日	佐賀の紹介
2	国際課で	学生生活を送るための必要な書類
3	買い物	大学付近の店の紹介
4	銀行で	銀行
5	指導教官の研究室で	学部紹介
6	食堂で	食堂の使用方法，メニュー
7	図書館で	図書館内の紹介
8	サークル	サークル紹介

2.2 構成の決定

1 つのタイトルの教材は，日本語教員の要望に基づき，新しい語彙の学習，本編と会話練習，クロスワードパズルのように，多様な形態の教材で構成した。これにより，学習者は飽きずに，効果的な学習ができる。1 タイトル分の教材の構成を表 2 に示す。

表 2　1 タイトルの構成および役割と担当

構成	役割	担当
オープニング	音声	日本語教員
	撮影・編集	修了生
新しい語彙	撮影・編集・音声	修了生
	イラスト・編集	スタッフ
本編	撮影・編集	修了生
リピーティング	音声・編集	修了生
会話練習	音声	修了生
	アニメーション・イラスト作成	スタッフ
クロスワードパズル	問題作成・編集	修了生 スタッフ

※　すべてのシナリオは日本語教員が作成した。

2.3 作業チーム

前節の構成に基づいて，教材を作成するにあたり日本語教員や修了生およびスタッフだけでは行えない作業がある。たとえば，本学外での撮影が必要な場合の撮影許可や撮影協力の依頼，日本人学生や留学生などの出演者の確保などである。

これを解決するため，撮影場所である店舗や交通機関など学外の機関との交渉を本学の広報室に依頼した。また，日本語教員や広報室関係者を介して，日本人学生と来日している留学生を出演者として確保した。

しかし，このように関係する部署や人員が多くなると，頻繁に集合して打ち合わせを行い情報共有や意思の疎通をはかることが困難となる。そこで，教材を提供するLMSのフォーラム等の機能を利用して関係する部署や人員間のコミュニケーションをとるようにした。これにより，直接会わなくても情報の共有や教材の修正や更新どの情報交換が可能となる。また，完成した教材の試聴や動作確認も実際の環境で行える。今回の作業チームの構成を図1に示す。

2.4　撮影・編集と教材化

学内で撮影できるシチュエーションの教材から作業を開始した。撮影前にセリフの注意点などを出演者と日本語教員を交えて行った。これにより本編の再収録などは最小限に抑えることができた。

本学外での撮影が必要な場合は，事前に撮影許可と撮影協力を広報室に交渉を依頼した。その結果，空港，銀行，ホームセンターなど，実際の場所での撮影ができた。また，そこで働いている方に出演してもらうなどの協力も得られた。そのため，より実際に近い映像を教材の中に表現することができた。

教材化の作業は，eラーニングスタジオにて行った。作業は主に修了生が行った。課ごとに担当を決め責任を持って作業を行わせた。その中で，修了生から副教材の提案も行われ，実際に，「大学周辺Map」や「音声付き50音表」といった副教材を作成した。

日本語教員との調整作業や修了生への教材作成指導および作業時間の管理はスタッフが行った。

このようにして制作した『留学生のための日本語』の教材画面例を図2に，副教材の画面例を図3示す。

3.　まとめ

LMSを活用することは，スケジュールなどが合わせ難い場合，作業チームのコミュニケーションや情報共有に対して有効な手段であったといえる。

それでも，認識のズレが生じ、修正作業が思うように進まない場合があった。今後，今回のようなチームでの作業に際して，より有効なLMSの活用ルールなどを検討する必要があると考える。

今回の教材作成を通して，デジタル教材を作成したことのない日本語教員にとっては、デジタル教材への理解を持ってもらう機会となった。これを機に，オリジナルのデジタル教材開発に繋がれば，本学のeラーニングもより発展すると考える。一方，修了生は「デジタル表現技術者養成プログラム」で学んだ技術の再確認とスキルアップの機会になった。さらに，様々な立場の人との関わりの中で得たソーシャルスキルも向上した。特に協力頂いた交通機関や店舗での撮影を通して，現場だからこそ得られた経験は大きいと考える。

今後の課題として，実際に留学生向けに教材の活用を開始するに当たり，教員・職員・学生の協働が必要と考える。留学生の窓口になる事務職員，留学生を指導する教員やサポートする学生，技術面のサポートのeラーニングスタジオが一体になることによって当初の目的である，佐賀大学に初めて来る留学生の来日前のモチベーション・プログラムとして，eラーニングを使った日本語学習教材が十分に活用されると考える。

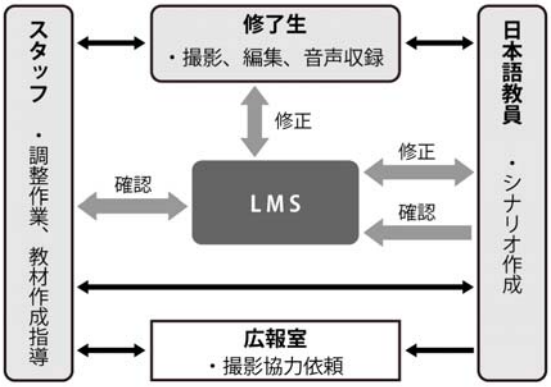

図1　作業チームの構成

図2　『留学生のための日本語』教材画面

図3　『留学生のための日本語』副教材画面

参考文献

(1) 早瀬　郁子・久家　淳子・藤井　俊子・早瀬　博範・穂屋下　茂：“留学生のための日本語教材の試作”，2011PC Conference 論文集，pp.188-189（2011）.

(2) 早瀬 郁子, 城 保江, 久家 淳子, 藤井 俊子, 早瀬 博範, 穂屋下 茂：“来日前に役立つ留学生のための日本語教材開発”，日本リメディアル教育学会第7回全国大会予稿集, pp.199-200（2011）.